中尾会長追悼

中尾先生とのこと

小高峯夫

中尾先生は絵が本当に好きな人だった。どんな稚拙な作品でも熱心に見てくれた。そして、「ここをもう一寸工夫すればグッと良くなる」といい、その場に絵具と筆があろうものならたちどころに手を入れてしまう癖があった。最初の頃は有難く嬉しくもあった。しかしそれは自分のためにならないもので、先生の筆のタッチは鋭くきれいだが、そのあと自分の筆がどうにも繋がらない。先生は誰の絵にも手を入れる訳ではなく、私があまりにも不器用で進歩が遅いので見かねてのことであったと思う。

ある時絵の話中、私は生意気にも「先生の絵は私の描き方とは違うので参考には出来ません」と言ってしまった。その時先生はカッと厳しい顔をされたが何も言わなかった。えらいことを言ってしまったとすぐ後悔したが後の祭りだった。絵のことを真剣に考えすぎて常軌を失っていたのである。そのころ、私は自分の描き方など何もなく口ばかりのことであった。

そのことがあってから何となく先生の前に顔を出しずらくなってしまった。このままではいけないと、私は一大決心をした。会社勤めが定年になるのを待ちうけ、すぐさま武蔵野美術大学の通信部へ入学した。周りから見れば今更アホかと思われた。しかし私は大真面目だった。一から出直して絵の道を究めたいと考えたのである。

いまさら気が付くのもおかしいが、学校というところは、何もかも教えてくれるところではなく自ら学べる環境を提供してくれるだけだ。それどころか絵画制作に関係ない教科カリキュラムがどっさり仕組まれている。

閉口しながらも踏み込んでしまった道は行かなければならないと考え、生来の気真面目さで二年間の全教科を終了した。 さて結果はどうであろうか、これと言える成果は何もない。しかし、絵の歴史や美術全般に及ぶ教科は、おぼろげながらも自分の立ち位置というものを教えてくれた。自分の絵に対して自然と謙虚になり、より深く考えるようになった。それが成果として作品に現れているのかは別のこと・・・。

あの日はもう来ない

岡田三郎

先生はいつも時間前に来てホームのベンチで待っていた。昼前の電車は楽々と座ることができた。今日はどんな話になるか楽しみだ。この前は線について、生きている線、死んだ線、書は線であり絵である。その時々の息遣いが伝わってくる。絵画における命とはその筆使い、タッチがその絵の生命と言えるのではないだろうか。

先生がバラの絵を描いているところを見せて頂いた。パレットに絵具を絞り出し、油を加えてナイフで練りながら、自分の考えをまとめているかの様だ。やがてナイフで絵具をすくい取り、さっとキャンバスに置いていくのだ。大事なことは同じところをもう一度なでるようなことは絶対してはいけない。失敗かどうかは直ぐには分からないが少なくとも生きている。

筆の場合でも同じことが言える。いい感じの色が出るとやたらと同じ調子であちこち筆を入れ過ぎた経験をお持ちではないでしょうか！

先生から色彩の統一とか、バランスとか本当に色々教えていただいた。

電車が池袋に着くと何時ものように私の肩につかまりゆっくりと歩いて改札口を出る。私は先生が腰をかけられそうなところを見つけて休んで頂く。西口公園の中に腰を下ろせる所がある。そして芸術劇場の長いエスカレーターにたどりつくのである。

1999年6月　西支部懇親会　中央に中尾会長の姿

しかし、もうあの日は帰ってこない。・・・肩こしに先生の息づかいが今も残っているようだ。

思いだす言葉

富岡ネム

最初にこの文章が個人の感情にすぎないことを断わっておきます。

中尾会長に出会ったのは二十七年前のことでした。新日美を設立して十年と少し経った頃でしょう。会員の誰もが若く、芸術に対する真摯な思い込みは互いに譲る余地がなく、まるで若いマグマが弾け飛んでいるようでした。それを抑える側、飛び出してゆく側と、見方によっては躍動感あふれる会の姿でした。それは本展に出品された絵画や工芸の作品に反映され、実に未完成の豊かさがありました。会長にとっては頭の痛い時期だったかもしれません。

七、八年程前の委員会で会長が問われた課題がありました。今でも事あるごとに思い出します。

「人は何故絵を描くのか」今一度初心に返って考えてみよう、というものです。この質問に対する明解な答えはなく、結局作家個人の立ち位置で描き、発表した作品には責任を持つ、という事なのだと理解しました。

公募展も三十回を超えるといよいよ中堅の仲間入りです。会長にとっての使命感、願望は立派な作家が新日美から生まれ、知名度を上げたいという発言にも表れています。けれどこれは難題です。立派とは何を指すのでしょう。

四十回展を目前にして会長という柱を亡くした今、それこそ初心に返ってしかるべきでしょう。淘汰され沈静化した会は平穏です。けれど作家にとっても、鑑賞者にとっても必要不可欠な感動への渇望だけは忘れないようにしたいものです。安定に甘んじることなく、ひたすら新陳代謝を繰り返す若い会でありたい、と今だから思います。

画家伝

大石　亨

熱い抽象画家　カンディンスキー

カンディンスキーは一八六六年一二月四日五時、モスコーに生まれた。その星座は太陽、金星、水星を燃える木星の記号の射牛宮をもつ。それは理想的な占い記号で、彼の宗教的、哲学的素質はこれに関係あると思われている。

父は東シベリアの産で、母は生粋のモスコー女である。

一八歳の時、モスコー大学に入学、経済学を勉強した。その彼が卒業後、経済学者になることをやめ、画家となった動機はモスコーで開かれたフランス印象派の展覧会でクレード・モネの「枯れ草の大地」を見たこととワグネルの「ローエングリーン」を　聞いたことであった。

モスコーからドイツのミュンヘンに移住したカンディンスキーは、当初は主として風景画を描いていた。やがて、写実―物態を主に描き込むことに疑問を抱き、幻想と記憶による作画―抽象への道に入った。

抽象絵画を描き始めた当初のカンディンスキーの作品には、鮮烈な色彩が画面いっぱい縦横にあふれた、熱っぽく感覚的な激情のリズムを奏でている。―熱い抽象と言われる。

一九二二年、招かれてバウハウスの教壇に立つようになると画風は一変し、新たに幾何学的な形態や線による構成が作品の主軸として表れてくる。流動的な色彩の乱舞に代わって、点、直線、孤線、破状線、円、三角形等の堅固な図形が微妙に組み合わされて登場するのである。

そして晩年の作品には、こうした幾何学的要素が後退し、豊かな柔軟なフォルムが絡み合って多様な変化を示すようになる。

感情的な初期の作風と知的な中期の画面が統合され、カンディンスキー独自の抽象を完成した。